

# 超越論的演繹における所有としての表象

鄭 英昊

## 0. はじめに

本稿の目的はカントの『純粹理性批判』<sup>①</sup>において一つの問いをたて、それに答えることである。その問いとは、超越論的演繹（以下、演繹）における第一版と第二版の大きな違いである時間についての問い、すなわち、明らかに第二版のほうでは時間の果たす役割が小さくなっているのではないか、そしてもしそうであるとするならそれはどうしてなのか、という素朴な問いである<sup>②</sup>。

以下では、まず第一版に現れる時間を分析することによって、二種類の時間を取り出し、同時にその過程で、演繹の簡単な理解も示す（第一章）。続いて、第一章の議論を念頭に置いた上で両版に登場する意識（自己意識）の役割を考えることで、前述の問いに答えることを目指す（第二章）。

## 1. 第一版演繹における時間

### 1.1 二つの時間

第一版の時間に関して、まずはじめに注目したいのは次の箇所である。

私たちの諸表象は、それらがどこから発現しようと、それらが引き起こされたのが外的な諸物の影響によるにせよ、あるいは内的な原因によるにせよ、（中略）それらの諸表象は心の変様として内的感官に属し、だから、そのようなものとしてあらゆる私たちの認識は結局は、内的感官の形式的条件、つまり時間に従っているのであって、この時間においてそれらの諸表象はことごとく秩序付けられ、連結され、関係づけられなければならないのである。これが、以下の論述に際して徹頭徹尾根底におかれなければならない一般的な注意である。（A98）

演繹における時間についての分析をおこなう以上、カントがこれほどはっきりと時間について語る箇所を等閑に付すことはできない。また、他方第二版においてはこれに類する注意が見当たらないことはわれわれの問いの出発点ともなりうるであろう。ところで第一版において、時間についての言及はこの他にも多くあるのだが、ここでは以下の展開にお

いて非常に重要な位置を占めるもう一つの引用を挙げることによって時間の分析を始めることにする。

ところで、私が一本の線を頭のなかで引いてみたり、あるいは或る日の正午から次の日の正午までの時間を考えたり（中略）するときには、私はまず第一に必然的にこれらの多様な諸表象を次々と（nach der andern）頭のなかでとらえなければならないということは、明白なことである。（A102）

この箇所、ある一定の長さの時間が考えられているということは明白であろう（それゆえ、以下ではこの時間を〈思考された時間〉と呼ぶことにする）。しかし、ここでは同時に、その〈思考された時間〉とは別の時間もまた暗に示されているということを見逃してはならない。このことを示すのが上の引用で原語を示した「次々と」という表現である。この「次々と」という言葉で表現されている時間が、〈思考された時間〉と全く同じものだと主張する者はおそらくいないだろう。なぜなら、この「次々と」という表現で表されている時間は、考えるということそのものにもなう時間であり（おそらく数秒）、その時間の中で、ある一定の長さの時間（ここでは 24 時間）が考えられている、と理解されるべきだからである。つまり、この箇所では、第一に時間が考えられるのであるが、しかし同時に、その考えられる対象が表象であるかぎり、それらの表象を捉える者（あるいは捉えられる表象自身）にとっても、何らかの別の時間が常に経過しつつあることが示されているのである。ところで、ここで冒頭の引用でなされていた注意を思い起こすなら、この後者の時間は何ら不自然な存在ではないはずである。というのもそこでは、何らかの表象があるかぎり、それらの表象は必然的に時間に従うということが表明されていたのだから。

しかしこのことを認めて上の引用（A102）に立ち返るなら、〈思考された時間〉と冒頭の注意にあったような、表象が必然的に従わなければならない時間ははたして全く同じものなのだろうか、という問いが生じる。先にそれぞれの時間の長さに関しては、その明らかな差異を簡単に指摘したが、しかし問題は、両者の時間にその内容においても何らかの違いが認められるのかどうか、ということである。このことを明らかにするために以下では、暫定的に時間を二つに分けて、1.2 において、冒頭の引用箇所で「内的感官の形式的条件」とされていた時間を、続く 1.3 では〈思考された時間〉を、それぞれ究明することにする。

## 1.2 「内的感官の形式的条件」としての時間

この節では、内的感官の形式的条件としての時間について考察する。ところで、この時間の考察に先立って、最初の引用（A98）が演繹の冒頭部分に位置することが思い起こされるなら、カントのあの注意の根拠を探るにはそれ以前の箇所へ、つまりは超越論的感性論へ向かわねばならないことは明らかである。この時間については、以下の三つの箇所から手がかりを得よう。

時間は、すべての直観の根底にある一つの必然的表象である。（A31/B46）

時間は、いかなる論弁的概念、ないしは、よく名付けられているように、一般的概念でもなく、感性的直観の一つの純粹形式である。（A31/B47）

時間は、内的感官の形式、言いかえれば、私たち自身と私たちの内的状態の直観の形式以外の何ものでもない。なぜなら、時間は外的な諸現象のいかなる規定でもありえないからである。時間は形態にも、あるいは位置その他にも属さず、それとは逆に、時間は、私たちの内的状態における諸表象の関係を規定する。そして、この内的直観はいかなる形態をも与えないという、まさにこの理由で、私たちはまたこの欠陥を類比によって補うことを求め、時間継続を無限に進行する一つの線によって示し、（A33/B49）

これらはすべて超越論的感性論の『時間について』と題されている節からの引用であるが、前の二つの引用では、時間が概念ではなく、すべての直観の根底にある一つの必然的な純粹形式であることが示されている。この点に関しては、最後の引用にも一見同様のことが書かれているように思われるが、しかし、この箇所にはさらに重要な示唆がある。それは、その最後の部分で「時間継続を無限に進行する一つの線によって示す」ことができるとされていることである。このことはわれわれの多くにとっておそらく馴染みの考え方であると思うし、先に示した部分（A102）において、直線と時間が並べて述べられていたことから考えるなら、カントにとってもいわば当たり前の考え方であったのかもしれない。しかし、この考え方は次節 1.3 の考察の手がかりになるだろうから、指摘されてしかるべきであろう。

しかしながら、本節ではさしあたって「内的感官の形式的条件」としての時間について得たものをまとめておこう。以下の議論の整理のために、この時間を<形式としての時間>と名付けておくと、次のような規定を与えることができるはずである。

＜形式としての時間＞は、そもそも概念ではなく内的感官の形式的条件として、すべての表象が私たちの内的状態に属するかぎり、必然的にそれに従うべきものである、と。

### 1.3 ＜思考された時間＞

前節 1.2 でわれわれは時間を直線のイメージによって示すという一つのヒントを得た。このことを＜思考された時間＞に直接当てはめて、＜思考された時間＞とは、直線によって示された時間のことだ、としても問題はなさそうだが、少し回り道をしよう。そして、そもそもカントは思考されるもの、つまり思考の対象についてどのような考えを持っているのだろうか、ということから問うてみよう。

#### 1.3.1 思考の対象と統一

まずは、以下の引用から手がかりをつかもう。

私たちが思考しているものが、私たちが一瞬間以前に思考したものとまさに同じものであるという意識がなければ、諸表象の系列におけるすべての再生産は無益となるであろう。なぜなら、私が思考しているものは、現在の状態における一つの新しい表象となってしまう、この表象は、表象を次々と産出したはずの作用には全然属さないことになってしまう、そうした表象の多様なものは常にいかなる全体をもなさなくなるに違いないからである。というのも、この多様なものは、あの意識のみがそれに与える統一を欠いたからである。(A103)

思考の対象とは何か、について最も簡単に答えるなら、それは表象である、とすればいいだろう。しかし、この箇所ではカントはさらに次のことも求めている。つまり、思考対象は、一つの全体（統一）をなすために同一の作用に属さなくてはならない、とされているのである。ここでもやはり前節 1.2 で確認した＜形式としての時間＞は念頭に置かれている（「一瞬間以前」「次々と」という表現から見てとれるはずである）が、さらにこの時間の中にある諸表象、あるいは「多様なもの」は意識による統一を与えられなければならない、この意識「のみ」がその統一を可能にするものだとされているのである。

ところで、われわれはこの箇所だけでは、未だ統一を受けていない多様なものが意識による統一を得なければならない、とされていることしか手にすることはできなかった。さらに＜思考された時間＞を明確にするには、この意識による統一について考える必要があるだろう。

### 1.3.2 超越論的統覚と総合的統一

上記の課題に答えるため、早速このことに役立つような以下の二つの引用を参照しよう。

なぜなら、この一つの意識こそ、多様なもの、順次直観されたもの、また再生産されたものをも、一つの表象のうちへ合一せしめるものであるから。(中略) この意識なしでは、概念も、また概念とともに対象についての認識も、全く不可能なのである。

(A103)

そこで私たちは言う、私たちが対象を認識するのは、私たちが直観の多様なものにおいて総合的統一を生じさせたときであると。(A105)

上の二つの引用において明らかになることは、われわれが問題としている意識が多様なものに総合的統一を与えて初めて、概念、さらには対象についての認識が可能になる、とされていることである。さらに、ここで述べられている対象とは、もはや単なる多様なものではなく、概念なしには考えられない認識の対象である。ところで、この認識の対象は概念を通じてのみ可能であり、しかも「思考は概念による認識である」(A69/B94) のだから、この認識の対象、つまり客観は思考の条件に従うはずである。このことを念頭に置けば、以下の引用が決定的な意味を持つはずである。

可能的経験一般のア・プリアリな諸条件は同時に経験の諸対象の可能性の諸条件でもある。ところで私は次のように主張する、すなわち、さきに挙げた諸カテゴリーは可能的経験における思考の条件以外の何ものでもない(中略)、と。(A111)

ここで述べられていることをそれ以前の考察とともにあわせて考えるなら、認識の対象が従う思考の条件こそカテゴリーであり、さらに、「経験の諸対象の可能性の諸条件」は「可能的経験一般のア・プリアリな諸条件」でもあるのだから、この認識の対象の条件であるカテゴリーはまた、「可能的経験一般のア・プリアリな諸条件」でもある、と理解することができるはずである。

以上をまとめるなら、われわれが考察した意識は、多様なものにカテゴリーに従って総合的統一を与えることで、認識の対象、すなわち客観を可能にするのであり、ひいては、可能的経験一般をも可能ならしめるものである、と断言するだろう。

ここでさらに、この意識と深く関わる非常に重要な語句について以下の箇所を確認しておこう。

ところで、諸直観のあらゆる与件に先行し、そして諸対象についてのあらゆる表象がそれとの連関においてはじめて可能であるような、意識のそうした統一なしでは、いかなる認識も、認識相互のいかなる連結や統一も、私たちにおいてはおこりえない。ところで、こうした純粹で、根源的で、不変の意識を、私は超越論的統覚と名付けようと思う。それがこの名称に値するという事は、最も純粹な客觀的統一ですら、すなわち、ア・プリオリな概念（空間と時間という）の統一ですら、その諸直観がこの超越論的統覚と連関することによってのみ可能であるということから、すでに明らかである。(A107)

この箇所において先ほどからの意識を、カントが「純粹な、根源的な、不変の意識」とし、さらに「超越論的統覚」と名付けていることが明らかになるだろう。つまりこの超越論的統覚によって、あらゆる統一が可能になるのである。

ところで、本節 1.3 全体の本来の目的は、時間についての考察であったのだから、われわれはさらに最後の一文にも十分注目しておかなければならない。というのもここでは、空間と時間という概念の統一が、超越論的統覚との連関によってのみ成立することが言われているからである。前節 1.2 で考察したこととこの点を比較するなら、まさにこの点こそ 1.1 で暫定的に分けた二つの時間の決定的な違いを示すものである。そこで、以上の考察を次のようにまとめておこう。

＜思考された時間＞とは、たとえば直線のように、超越論的統覚との連関によって統一を得たものであり、概念と呼ばれるべきものである。そしてさらに、これまでの議論から考えるなら、この時間は当然カテゴリーなくして考え得ないはずであるから、これを＜カテゴリーを伴う時間＞<sup>④</sup>と名付けかえることにする。

#### 1.4 二つの時間についてのまとめ

ここで、以上で見てきたことについてまとめておこう。本節までにおいては、第一版演繹の解釈を通じて、1.1 で暫定的に分けた二つの時間の明白な違いを取り出し、各々を以下のように名付け、規定した。

① ＜形式としての時間＞：この時間は概念ではなく、あらゆる表象が内的であるかぎり必然的に伴うところの、内的感官の直観形式である。

② <カテゴリーを伴う時間>：この時間は、<思考された時間>と呼ばれていたもので、超越論的統覚との連関によって統一を得た概念であり、それゆえカテゴリーなしにはありえない時間である。

ところで、ここでそもそものカントの意図を思い起こしておくのなら、この演繹で重視されるべきはもちろん②の方の時間であることは明らかである。前者の①の時間は基本的には感性論までの問題意識に沿うものであり、新たに問題になるのはむしろ後者の時間である。この後者の時間には少なくとも悟性的側面が組み込まれている。そうすると以下のように言うことができるであろう。②の<カテゴリーを伴う時間>はそれが時間であるという面から見られるなら、あらゆる表象が従うところの形式的直観としての感性的側面を有しているが、しかし一方それが「カテゴリーを伴う」という面から見られるなら、同時に悟性的側面をも有すものである、と。このことはもちろん重要である。というのも、そもそもこの演繹における議論は、この悟性的側面がいかにして認識の可能性、経験の可能性の条件たりうるか、ということが問題であったからである。

以上のように演繹の解釈と二つの時間の規定という準備が整った今や、われわれは続いて、冒頭に示した問題に即して、さらに演繹の議論を意識という語を中心に見ていくことにしよう。

## 2. 意識について

以下では第一章の議論を前提に、上で整理した①と②の時間の決定的な相違点、すなわち超越論的統覚あるいは超越論的意識を究明することにしよう。2.1 において第一版の意識を、2.2 において第二版の意識をとりあげることにする。

### 2.1 第一版演繹における意識

まずは、意識について新たに登場するいくつかの特徴を次の引用から整理しよう。

私たちは、およそ私たちの認識に属しうるすべての表象に関して、すべての表象の可能性の必然的条件として、おのれ自身のあまねき同一性 (der durchgängigen Identität unserer selbst) をア・プリオリに意識する (というのも、表象はそれが他のすべての諸表象とともに一つの意識に (zu einem Bewußtsein) 属し、したがって一つの意識のうちで少なくとも連結されなければならないということによってのみ、私のうち (in mir) で、何か或るものを示すからである)。(A116)

われわれは 1.3 において次のこと、すなわち、意識の統一は、常に諸表象が従うところの〈形式としての時間〉の移り行きを議論の前提とすることによって、必要とされたことをすでに確認した。しかし、上の引用箇所では、このことが少し変わった仕方で表現されていることに気付く。その変化について三点に分けて説明しよう。

まず第一に、ここでは意識の統一が「一つの意識」あるいは、「おのれ自身のあまねき同一性」とされていることが挙げられる。つまりこの箇所では、「表象に統一を与える」ことではなく、むしろ表象の所有者自身の意識の統一、あるいは同一性に重点が置かれている、と考えることができるだろう。

第二に、第一の点と関連して、「私たちの認識」「私のうちで」などという表現からわかるように、表象の所有者が明示されているということも無視することはできない。もちろんそもそも表象は誰かの所有する表象であろうから、このことは第一章で追った議論においても暗黙のうちには了解されてはいたであろう。しかし、だからといってこのことが重要ではない、とするわけにはいかない。ここでは表象の所有者について明示的に語られている、ということを重視しておこう。

さらに第三に、これもやはり先の二つの変化と深く関連することであろうが、この表象の所有者の同一性が、それらの表象に統一が与えられるべきか否かに関わらず、「すべての表象の可能性の必然的条件」とされていることが指摘されるべきだろう。もちろん引用部の後半部、すなわち（ ）内の説明からは、カントが単なる表象ではなく、なんらかの他の表象と連結して統一をなすような表象を示唆していることは認められる。しかし、ここでさらに次の引用を確認しよう。

すべての表象は、可能的な経験的意識との必然的連関をもっている。なぜなら、表象がこうした連関をもたず、この連関を意識することが全面的に不可能であったとすれば、このことは、そうした表象は全然現存していないと言うに等しいであろうからである。(A117 Anm.)

この箇所では、経験的意識が登場し、そもそもあらゆる表象自体の現存のために、その表象と経験的意識との連関が要求されており、〈形式としての時間〉において次々と捉えられる表象が統一的表象をなすかどうかについてはもはや無関心なのである。

ところで、この箇所をとりあげることによって、さらに考察しなければならないことが現れてしまった。というのもこの第三の指摘はそもそも、表象の所有者自身の同一性あるいは一つの意識が、「すべての表象の可能性の必然的条件」とされていたことに対してのも



のであったのに、この引用では、すべての表象の現存の条件が<sup>1</sup>可能的な<sup>2</sup>経験的意識との連関とされているからである。よってわれわれは、前者の同一性あるいは一つの意識と後者の可能的な経験的意識との関係を問わなければならないだろう。この問いの答えは、以下の箇所が与えてくれる。

しかしすべての経験的意識は、超越論的（すべての特殊的経験に先行する）意識との、つまり、根源的統覚としての私自身についての意識との必然的連関をもっている。それゆえ、私の認識においてはすべての意識は（私自身についての）一つの意識に属しているということが、端的に必然的である。（A117 Anm.）

ここにおいて経験的意識が超越論的意識との必然的連関を持つこと、そしてこの後者の超越論的意識こそが、一つの根源的な意識であることがわかる。さらにこの一つの意識は、われわれが第一章で確認した超越論的統覚（ここでは根源的統覚）と同じものであるということも明らかであろう。

ここで本節で確認したことを順序どおり簡単にまとめておこう。

まずはじめに、表象の現存の条件として、表象と経験的意識との必然的連関が述べられ、次にその経験的意識と超越論的意識との必然的連関が述べられた。さらに、この超越論的意識こそが一つの意識であり、超越論的統覚であることも明らかになった。

続いて、この過程においてどのような注目すべき事柄が見出されるのかを以下に整理しておこう。

第一に、表象の所有者が明示的に語られることにもなって、＜形式としての時間＞の中にある諸表象同士に総合や統一を与えることよりもむしろ、その所有者自身が統一を保つことに統一の意味が変化していること。第二に、表象と経験的意識さらには超越論的統覚としての自己意識との必然的連関が要求されていること。そして第三に、この点こそが前章 1. で検討した箇所との決定的な違いであり、かつなぜわれわれが意識の究明を試みているのか、ということの答えでもある点であるが、それはこれらの箇所では時間に対する言及が一切ない、ということである。このことは当然、時間について問うたわれわれにとって特筆すべき事柄である。

ところで実は、本節 2.1 での引用は、冒頭の一つ（A116）を除きすべて同じ部分からのもので、しかもこれらは一つの注の中で語られている文章である。もちろんそのことを理由に、この箇所に価値を与えないわけにはいかないだろうが、とはいってもやはり第一版における演繹の中心がこの箇所である、とはさすがに言い難いであろう。それゆえわれわ

れは、さらに次節 2.2 において、第二版の演繹について簡単な確認をしておこう。ここにおいて、以上の問題が中心的に扱われていることが明らかになるだろう。

## 2.2 第二版演繹における意識

以上の議論を踏まえた上で、以下では第二版の演繹について簡単に確認しておこう。われわれが確認すべきことは、やはり第二版においても前節 2.1 で整理したものと同一の構造が見られる、ということである。このことは、第二版演繹のかなり早い段階で登場する次の二つの箇所が示すはずである。

我思考す<sup>レ</sup>ということは、あらゆる私の表象に伴うことができるのでなければならない。なぜなら、さもなければ私のうちでは、全然思考されえないものまでも表象されることになるからであるが、これは、そうした表象が不可能であるか、それとも少なくとも私にとっては無いものであるかのいずれかと同じことにほかならない。(B131)

私はこの表象（＝我思考す<sup>レ</sup>という表象：筆者注）を、それを経験的統覚から区別するために、純粹統覚と名付ける、あるいはまた根源的統覚と名付けるが、それは、この統覚は次のような自己意識であるからである。すなわち、あらゆるほかの諸表象にも伴いなければならず、かつすべての意識において同一のものであるところの、我思考す<sup>レ</sup>という表象を産みだすゆえ、いかなるものによってももはや導かれえないような自己意識であるからである。(B132)

ここでも前節 2.1 でわれわれが見たように、根源的統覚が同一であること、そして、その統覚が私の表象に対して必然的連関を有すことが述べられていることは明らかであろう。つまり、次のように言うだろう。上の二つの引用においてもすでに、前節で確認した三つのこと、すなわち表象の所有者自身の統一、そして表象とその所有者の自己意識との必然的連関、さらに＜形式としての時間＞の消失が確認されうる、と④。そしてまさにこの前節との類似点が同時に前章 1.での分析との相違点でもあるということが、既に指摘したようにわれわれにとって重要な意味を持つのである。つまり、前章 1.で見たような第一版で強調されていた時間が、本章 2.において中心的に分析された超越論的統覚あるいは超越論的意識の登場にともなうて、姿を消すように見える、ということをやはりわれわれは問題にしなければならないということである。

ところで、この指摘はいったいいかなる意味を持つのか、そして特にわれわれが問うた

冒頭の問いに対して、この指摘からいかなる答えが可能であろうか。このことを最後に考察することにしよう。

### 2.3 超越論的統覚の役割

われわれはこれまで、演繹について前章 1. では時間を中心に、本章 2. では意識を中心に検討してきた。その中で気付かされたことは、超越論的統覚あるいは超越論的意識が前面に出るにつれ、〈形式としての時間〉が見当たらなくなる、ということである。しかし、今やこの二つのことの関係やいかに、ということが当然問われるべきであり、答えられるべきことである。

この問いに対して、私の提示する答えは以下のようなものである。すなわち、超越論的統覚において、単に統一を与えるという作用のほかに、私の表象に対する所有という関係が示されることにより、第一版で〈形式としての時間〉が果たしていたところの、表象に対する必然的形式という役割が超越論的統覚によって担われる、というものである。

さらにもう少し詳しく述べるなら次のように考えうる。つまり、われわれが見てきたように、超越論的統覚あるいは根源的統覚が表象の所有者として表れることによって、単に現実的に私のものである表象のみではなく、私が所有する表象、つまり私にとってのあらゆる可能的な表象すらもが、それが私の表象でなければならない以上、超越論的統覚との必然的な連関を有することになるのだ、と。ここでわれわれは、1.2 で既に分析した〈形式としての時間〉を思い起こすべきであろう。そこにおいてこの時間は、それが表象に対する必然的形式であり、あらゆる表象が従わざるをえないような時間であることが確認されたはずである。ところが今や、その形式性という側面がもはや同一的な自己が私の表象を所有するという関係の中に呑み込まれているのである。

さらにこのことから、私が先ほどから消失した時間を〈形式としての時間〉にのみ限定していることも理解されるはずである。というのも、実際第二版においても、〈カテゴリーを伴う時間〉は消えずに残っているからである。しかしながら、〈形式としての時間〉に関しては同様ではない。つまり、超越論的統覚の登場の後には、この時間が表象に対して有する必然的形式性という特徴が演繹の議論に対してもはや役割を果たすことがなくなるのである。以上でわれわれは〈形式としての時間〉が演繹において果たす役割の変化をその内容において、つまり、なぜその役割が変化しうるのか、ということを理解しえたであろう<sup>(5)</sup>。

### 3. おわりに

以上本稿において、統覚の所有という側面を大きく取り上げることによって、演繹における時間の役割の変化の内実が示されたであろう。しかし、このことは次のような問題を、つまり、いったいどちらがカントにとってより本来的な思想であるのか、あるいは、両版のどちらの議論がよりすぐれているのか、といった問題を引き起こすかもしれない。こうした問題はもちろん受け取られるべきであろうが、本稿の目的はそのことにまで及ぶものではないゆえ、われわれはむしろ、時間と超越論的統覚の関係を少しでも明らかにしえたことで満足すべきであろう。

### 註

- (1) 以下『純粹理性批判』*Kritik der reinen Vernunft* (Philosophische Bibliothek ; Bd. 505) からの引用は、慣例に従い、第一版を A、第二版を B として、ページ数を表記する。また、引用文中の傍点はすべて原典での強調である。尚、邦訳については原佑訳『純粹理性批判 上』、平凡社ライブラリー、を参考にし、適宜改めた。
- (2) このことはしかし、意外にも古典的注釈書においては問われていない。たとえば、ケンプ・スミス (Kemp Smith, 1923) は、演繹論における時間の重要性を指摘しているのみである。また、ペイトン (Paton, 1936) は、時間の重要性に加えて、演繹の議論が進むにつれて時間が後景に退くことをも指摘しているが、そのことについて何ら説明を与えていない。
- (3) ここでの「伴う」という表現は、時間がカテゴリーを従えるというように、時間に優位を与えることを全く意図していない。むしろ時間とカテゴリー、感性と悟性が対等な関係で結びつく状態を示すものとして理解されたい。
- (4) ケンプ・スミス、ペイトンの両者はともに、この第三の指摘はもちろんのこと、第一の指摘についてもさほど重要視してはいない。さらに、両者とも第二版のこの箇所と、前節 2.1 で見た第一版の箇所（主に 117 Anm.）との共通点も指摘してはいない。
- (5) 大きな対比のもとでは、このことが第一版と第二版との時間の役割の違いを説明するであろう。しかしながら本稿の議論から、この違いはむしろ統覚の登場に起因することが理解される。そうすると、詳細な分析のもとでは、第一版の内部においてすでに統覚の登場以前、以後という形で、時間の役割の変化は生じており、また統覚の登場以降の箇所においてはむしろ第一版と第二版は共通点を有する、と理解することは注意されたい。

### 文献

- Kemp Smith, N. (1923). *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, The Macmillan Press Ltd. (2001, 山本冬樹訳、『カント「純粹理性批判」註解』、行路社)
- Paton, H. J. (1936). *Kant's Metaphysics of Experience*, The Macmillan Company

[京都大学大学院修士課程・哲学]